

# 中国近世の巡礼—成尋『参天台五台山記』をめぐって—

高橋弘臣

## はじめに

『参天台五台山記』とは、日本の天台宗の僧侶である成尋<sup>じょうしん</sup>が1072年、宋代（960～1279）の中国へわたり、天台・五台山へ巡礼に赴いた際の見聞を、日記形式で綴った書物である。日本僧侶の中国旅行記としては、唐代に円仁がやはり五台山を巡礼した時の記録である『入唐求法巡礼行記』とならび称される。

成尋は非常に筆まめで几帳面な人物であったようで、また中国の様子を日本に伝えようと考えていた形跡があり、その記述は淡々としながらも極めて詳細かつ的確であり、当時の中国側史料には見られない、貴重な記事を数多く提供してくれる。今回の報告では成尋の経歴や『参天台五台山記』の内容を紹介しながら、成尋が天台・五台山を巡礼した際の足跡をたどってみたい。

## 1 成尋の生い立ち

成尋は寛弘8年（1011）に生まれた。父方は藤原氏で、祖父は陸奥守等をつとめた実方、父は貞叙である。母方は源氏で、母の名は未詳だが、祖父は源高明、父は権大納言俊賢と伝えられる。成尋は7才の時に京都岩倉の大雲寺に入り、文慶を師とした。文慶は三条天皇の護持僧をつとめた名僧であり、成尋は文慶から伝法血脈を受けた。

この後成尋は長久2年（1044）、33才の時に大雲寺別当となり、天喜2年（1054）には延暦寺の阿闍梨に補任された。当時、藤原頼通が関白をつとめており、頼通は宇治の別荘に大日如来の像を安置して寺院とし、平等院と名付け、阿闍梨を置いて法行を行わせていた。成尋もそうした阿闍梨の1人選ばれ、約20年にわたって頼通の護持僧をつとめた。

治暦4年（1068）、後冷泉天皇の崩御と同時に頼通が関白を辞任したため、成尋も関白の護持僧を罷めた。そしてこの頃から中国へわたって五台山に詣でようという考えを抱き始め、成就を祈願して、横になって休まない「常坐不臥」という荒行を3年間続けたりした。さらに延久2年（1070）には後三条天皇に対し、中国へ渡航して五台山へ参拝することの許可を求める申し文を提出している。

## 2 中国渡航の目的

### (1) 五台山の文殊信仰

五台山は山西省東北部の代州にあり、最も高い場所は海拔3千メートルを超える。5つの峰があり、それらが盛り土の台のように見えるところから五台山と称された。またその一帯は気候が非常に寒冷で、夏でも雪が舞うことから、清涼山とも呼ばれている。

五台山は西晋（265～316）の末期、神仙道の霊場として開かれた。その後東晋時代（317～420）に、『華嚴経』という教典がインドから中国へ持ち込まれて翻訳されたが、その中に「北方に文殊菩薩の住所あり、清涼山と名付く」との記述があり、清涼山を中国の現実の山と結びつけて解釈しようという気運が生じてきた。五台山は中国の北方にあり、清涼山とも呼ばれていたこと、山中にたちこめる独特の霊気などもあったこと等から、文殊菩薩が住むと信じられるようになり、多数の仏教寺院が建設されるに至った。遅くとも北魏（386～534）の末頃には、五台山における文殊信仰が成立していたと考えられている。

また唐の高宗の時代（649～683）には、インドから五台山に巡礼に来た僧侶仏陀波利が、文殊の化身に出会い、その命を受けてインドへ戻り、『尊勝陀羅尼』なる教典を携え再び五台山へ赴いたとの伝説が広まったこともあり、以後僧侶の巡礼が盛んになった。

## （2）日本僧侶の五台山巡礼

五台山の文殊信仰は早くから我が国にも伝えられ、唐の時代に中国へ渡った僧（玄方・靈仙・円仁・恵運・円珍・宗叡等）はいずれも五台山に詣でている。しかしこれらの僧が中国へ赴いた主たる目的は、五台山巡礼ではなく、求法留学、即ち中国仏教について学び且つ研究するため、巡礼は副次的な目的であった。

ところが宋代以降、日本の僧侶は求法よりも五台山巡礼を主たる目的として中国へ渡りようになる。そうした僧侶の1人が成尋である。僧侶の中国渡航の目的が変化した原因としては、①日本の仏教学が発達するのと相反して、中国の仏教学が停滞し、もはや中国仏教から学ぶものがなくなっていたこと、②当時日本では末法思想が流行しており、僧侶の間には文殊菩薩が住む五台山を巡礼することで、文殊菩薩の慈悲によって自らの罪業を消滅させ、来世は阿弥陀の住む浄土に往生しようとの願望が広まっていたこと、が挙げられる。

# 3 成尋の足跡

## （1）中国への渡航

当時の中国の貿易船には、秋8月に日本を訪れ、春3月に中国へ帰る定期的なものが存在した。成尋は当初その貿易船に便乗して中国へ渡ろうと考え、天皇に渡航の申し文を提出した。ところが僧侶としての成尋に対する評価が極めて高かったため、天皇や貴族は成尋を手放したがらず、申し文を裁可しようとしなかった。そこで成尋は密航を決意し、延久4年（1072、宋熙寧5年）3月19日、同行の僧侶7名とともに、備前壁島から、宋の貿易商人孫忠が手配する貿易船に密かに乗り込み、中国へ渡航したのである。

## （2）成尋の足跡

以下、中国における成尋の足跡を年表形式で簡単にまとめておく。

### ①天台山への巡礼

成尋一行は4月13日、杭州に到着し、5月3日まで滞在。その間、府の役所に出向き、天台山・五台山巡礼の許可を申請したり、市街を散策したり、興教寺等杭州の名刹に参詣したりして過ごす。

5月4日、天台宗の総本山天台山を目指し、杭州を出発。水路にて天台山へ向かう。

13日、天台山国清寺に到着。8月5日まで滞在。その間、国清寺をはじめとする諸寺や華頂山・石橋等の霊場を巡礼し、講会等にも参加。

## ②開封へ

8月6日、天台山を出発。杭州を経、運河を航行し、10月13日、宋の都開封に到着。開封では当時の皇帝神宗から日本の風俗・地理・人口等について書面で質問を受け、また宮中に招かれ神宗に拝謁する。

## ③五台山への巡礼

11月1日、成尋一行は五台山へ向け出発、28日、五台山に到着。この日、五色の雲が出現し、以後成尋は不可思議な神通力を持つ僧侶と見られるようになる。また一行が開封を出発して五台山へ到着するまで一度も雪に煩わされなかったにもかかわらず、五台山に着いた途端、降雪に遭った。このことは道中文殊菩薩が加護していたことの証と考えられ、五色の雲が現れたことと併せて、成尋は高德の僧として益々尊敬されるようになる。

29日～12月1日にかけて大花嚴寺（現在の顯通寺）をはじめとする寺院・霊場を精力的に参拝して回る。

## ④再び開封へ

12月2日、五台山を出発し、26日開封に到着。途中まったく雨や雪に悩まされなかったが、開封に着いた翌日に雪が降ったため、また文殊菩薩の加護と見なされる。以後翌年（1073、宋熙寧6年、日本延久5年）4月まで開封に滞在。

3月1日には、使者が宮中から成尋のもとへ派遣され、宮中で祈雨（雨乞い）の法を修めるよう依頼する。このため成尋は2日から祈雨の法を行じたところ、4日～7日まで大雨が降ったため、神宗をはじめ周囲の人々は驚嘆した。

## ⑤中国への残留と同行僧侶との別れ

成尋は同行した僧侶達を先に日本へ帰し、自らは天台山・五台山で3年間修行した後、日本へ帰るつもりであった。そこで開封滞在中、同行の僧侶に日本へ持ち帰らせる仏典の購入や書写につとめていた。ところが成尋の徳の高さを目の当たりにした神宗は、成尋に対し、中国に残り自分のために仕えるよう要求し、成尋もそれまでの神宗の恩顧に報いるため、中国への残留を決意した。

4月14日、日本へ帰る僧侶達を見送るため、成尋は開封を出発、5月20日に杭州、6月8日明州に到着。明州で中国巡礼の報告書とでも言うべき『参天台五台山記』を完結させ、仏典とともに帰国する僧侶に託す。

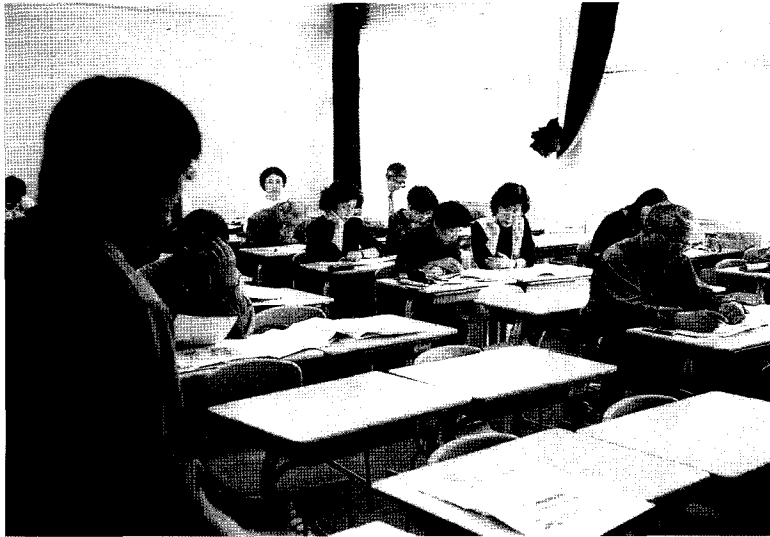
この後、成尋は天台山・五台山で修行し、開封へもどり、1081年（宋元豊4年、日本永保元年）、その地で没したといわれる。

## お わ り に

『参天台五台山記』には、中国側の史料に見られないような貴重な記録が数多く含まれている。例えば天台山・五台山や運河に沿った寺院の様子が詳細に書き記されているが、それらの中には中国仏教史上、唯一無二ともいうべき記事がある。また運河や駅・遞鋪の様子等、交通史に関する記録にも、他に見られないものが存在する。さらに当時の物価や貨幣使用の実態等、社会経済史に関わる記録も豊富に書き残されており、風俗・宮廷事情等を伝える記録も貴重である。今後は『参天台五台山記』と中国側の史料とをいかにかみ合わせ、中国側の史料を補足していくかが課題となろう。

### 主要参考文献

- 青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』（吉川弘文館、1963年）。
- 伊井春樹『成尋の入宋とその生涯』（吉川弘文館、1996年）。
- 伊原 弘『宋代中国を旅する』（N T T出版、1995年）。
- 島津草子『成尋阿闍梨母集・参天台五台山記の研究』（大蔵出版、1955年）。
- 塚本善隆「成尋の入宋旅行記に見る日中仏教の消長」（『支那仏教史学』5-3・4、1941年）。
- 日比野丈雄・小野勝年『五台山』（座右宝刊行会、1941年）。
- 平林文雄『参天台五台山記校本並に研究』（風間書房、1978年）。
- 森 克己『日宋貿易の研究』（国立書院、1948年）。
- 同 上「『参天台五台山記』について」（『駒沢史学』5、1956年）。



講 義 風 景 (1)